

教育新聞

歴史の授業をしていると、時々「中世の甲冑はすごいぶん派手」「戦いの時にいちいち名乗りをあげる」ことに疑問が出る。名乗りをあげている武士が敵にいとまたやく殺されてしまった元寇の話では、笑い声も起る。

しかし、これこそが鎌倉時代に生まれ、その後数百年にわたって武士の有り様を決定した「ご恩と奉公」が具現化された姿と言えるのだ。

とにかく鎌倉武士は目立ちたがり屋だ。鎧流馬や大追物といった弓馬の道に長けるのはもちろんだが、戦においては誰よりも目立つことが大切だった。義経が着用していた赤糸威鎧をはじめ黄・緑・紫・紺に金色に輝く留め金と、とにかくキンキラキンなのが平安・鎌倉時代の鎧である。

だが、継ぎ目や隙間が多く、ここを狙って矢を射通し裏まで貫通させることもさほど難しく

はなかった。「常に鎧を突き上げてさね(小鉄片)とさねの間をつめて隙間をなくせ。しころ(兜の後ろに垂れ下がっている覆い)を兜に密着させよ」とは16歳のわが子に聞かせた熊谷直実の教訓である。

また弓に次いで大切な武器だった刀も馬上から切り下ろす、あるいはすれ違いざまに頸動脈を切り裂くといったことから、片手で持てるような細身で軽く「反り」のある太刀へと変身した。とどめは「鎧通し」と呼ばれる小刀で、これは鎧の隙

に突かれた。義経とことあるごとに衝突した梶原景時はその時の軍監であった。頼朝の信任が厚かった彼は後に讒言者として義経と対比される悪役になってしまったが、実際には御家人の安全を慮って義経を諫めた人である。

このように、戦功を公正に吟味するための役や仕組みがあったことは、鎌倉武士にとって戦が一族繁栄のための大切な場であつたことを証明するものであり、公平さを何よりも重んじたことの表れでもある。

その2

目立つキンキラの甲冑

味方に自分の戦功焼き付ける

間から頸動脈や心臓を刺す武器であった。

中にはこの手続きを省いたために苦勞した御家人がいる。蒙古襲来絵詞の主人公・竹崎季長は、敵がうようよいる倉原に出

ててから戦ってはどうか」という意味合いのほうが強かったことが分かる。それは一重に「目立つ」ことを求めた結果である。誰に見せるためかといえ

ば、味方に対してなのである。当時、戦にはアドバイザーとしての軍監とか軍奉行と呼ばれる役職が同行していた。軍監に

は戦功あった者の具体的な記録を棟梁に報告するという役目もあつたので、公平無私な人が選

ばれた。義経とことあるごとに衝突した梶原景時はその時の軍監であった。頼朝の信任が厚かった彼は後に讒言者として義経と対比される悪役になってしまったが、実際には御家人の安全を慮って義経を諫めた人である。

今日残る絵詞はそのいきさつを子孫に残すために絵師に描かせたものだが、そもその始まりは季長が先駆けの証人を立てなかつたことに始まっている。歴史的なわけの功名と言えよう。彼もまさか自身の成功譚が700年後の教科書に載り、それを一億の子孫が見るなどとは夢にも思っていなかつたに違いない。

このように1行の記述、1枚の絵からも、楽しくしかも授業に役立つ教材が湧き出てくる。教材研究とはそのようなもので、授業のネタはそこいらじゅうに転がっている。大切なのは教師の歴史観とそれに基づく視点なのである。

きた 歴史学習を取り戻す

鎌倉時代の人・物・事

玉川大学学術研究所特別研究員 治 賀 多